

児童の持つ動物の死に対する概念の実態と発達差

○松本勝信^{**}、杉山陽亮^{*}、北山実香^{*}、松岡美鈴^{*}

Katsunobu MATSUMOTO, Yousuke SUGIYAMA, Mika KITAYAMA, Misuzu MATSUOKA

^{*}大阪教育大学教育学部、^{**}大阪教育大学

【キーワード】：死の概念、生命概念、死生観、生命観、生命愛護、心の教育

I 研究の背景と研究目的

小学校高学年や中学校において他人の命を奪う悲惨な事件が増えつつある。自然の事物・現象を学習対象とする理科教育の存在意義の一つに生命観の育成が上げられる。しかし、理科教育はその存在意義を果たしているのであろうか。

このとき、第3学年では生物の成長のきまりや体のつくり、生物同士のかかわり、第4学年では動物の活動や植物の成長と環境とのかかわり、第5学年では植物の発芽から結実までの過程、動物の発生や成長など生命の連続性、第6学年では生物の体の働き及び生物と環境とのかかわりなどについての科学的な見方や考え方を育てようとしている。しかし、そのために示されている学習内容はすべて、生命誕生からの成長変化と生命維持活動に関するものであり、死そのものは取り上げられていない。学習指導要領において、死が取り上げられているのは第4学年の「内容の取り扱い」において、「イについては、夏生一年生植物のみを扱うこと。なお、その際、それらと落葉樹を対比することによって植物の個体の死について触れること」とあるのみである。しかし、生命維持活動の認識のためにも、また、それに基づく生命観の育成においても、死を取り上げることは重要であると考えられる。それは、例えば、物の溶け方の認識において、溶ける事物・現象だけを取り上げるのではなく、溶けない事物・現象と対比することにより、物の溶け方の認識が深まるのと同じように、生命誕生から成長変化や生命維持活動の認識及び生命観育成のためには死を学習対象とすることは必要不可欠といえよう。

先行研究として、例えば日本理科教育学会の研究紀要の最近20年間をみると、小学校A区分と中学校第二分野などの自然認識に関する論文は28編みられた。しかし、そのいずれもが生命誕生からの成長変化や生命維持活動に関するものであり、動植物の死に対する自然認識に関するものは皆無であった。日本科学教育学会の研究紀要においても同様であった。

以上述べてきたような背景から、低・中・高学年児童の持つ人や動物の死に対する概念とその発達差について実態調査した結果について考察する。

II 研究方法

調査は質問紙法を用いた。調査内容は以下のものである。

「人やどうぶつはいつかは死んでしまいます。死んでしまったら、その人やどうぶつが生きるときとちがうことはなんですか。思いうかぶことをなんでもいいのでできるだけたくさん書いてください」

この質問は動物の死に対する概念を問うものであり、生命維持活動の終了による動物に起こる変化についての児童の持つ概念を聞くものである。上述のように、現在の小学校理科では生命誕生からの成長変化や生命維持活動などは扱うものの、死については取り上げていない。

調査対象は同一校で第1学年から第6学年までを調査することのできた6校2990人であり、第1学年438人、第2学年373人、第3学年442人、第4学年582人、第5学年513人、第6学年642人の児童である。

これらの結果について当日詳述する予定である。

参考文献

松本勝信・山崎亜紀穂(2003)「動物の死に対する児童の概念—低・中・高学年の発達差と理科のカリキュラム—」大阪教育大学理科教育研究年報、No.27,pp37-48.